

ヘンリー・フュースリ(Henry Fuseli, 1741–1825)は、彼が英国に渡り画家に転身する以前は J.J.ブライティンガーと J.J.ボードマーに師事した文筆家であった。また彼は友人 J.C.ラファーターの著作『観相学論』に挿図を提供することで、その成立に関与している。そのため、フュースリの芸術思想には彼ら 2 人の教師や友人ラファーターらの影響が見られる。

フュースリは、1793 年 1 月に発行された雑誌『アナリティカル・レビュー』において、登場人物の運動表現を重視し、時間的な絵画制作を志向する自らの造形理念を「詩的模倣 (poetic imitation)」と表現している。また、彼は英王立芸術院において 1801 年から『画法講義』を断続的に行っており、それには「詩的模倣」に類する概念を詳密に論じた「創案 (invention)」という表題を持つ 2 つの講義が含まれているが、これはブライティンガーの『批判的詩学』等の影響を示すものである。ブライティンガーによれば、創造主が現実には創造しなかったが、可能性としては創造され得た世界において行使されるべき神の摂理を模倣し作品化するのが、神の創造とは区別されるべき詩人の役割である。故にフュースリの言う「詩的模倣」は、単に文芸作品に取材した絵画制作のことを意味するのではなく、創造的な法則や摂理を発見し、その要素を絵画上に構成する「創案」によって物語世界を造形しようとする理念だと考えられる。

一方でフュースリは、『画法講義』においてラファーターの観相学理論を引用している。そのため先行研究においてはしばしば、フュースリの作品に見られる登場人物達の大仰な顔貌と動作が観相学に基づいた表現であると指摘されてきた。だがフュースリは、この「創案」の講義の中では、歴史画の主題を提示する際の情景(scenery)の優位を主張している。彼が演劇の視覚性を積極的に絵画に応用した画家であることを考慮すれば、この見解は舞台芸術の演出を念頭に置いたものと考えられる。ここで彼はシェイクスピアの『マクベス』を例に挙げ、マクベスの姿を原作通りの恐怖と狂気の肖像として造形するためには、その主題にふさわしい陰鬱な暗闇の情景を選択することが必要であるとした。歴史画上の人物の感情表現が決して、その個々の表情や動作の描写によって完結するものではなく、背景を含めた情景空間の視覚効果によって初めて適切に演出され得るというのである。したがって彼の作品に観相学的表現を見るだけでは、フュースリ研究としては不十分と言わなければならない。

本発表は、これらのことを前提として、あらためて『画法講義』を読解し、彼の「詩的模倣」における感情表現の体系を考察する。この読解は、当時のアカデミーの学生達に称賛されたというフュースリの優れた教授法と、そこで提示された方法論の一端を知る手がかりとなるだろう。